

## 改作本『夜寢覺物語』の構想

—大君遺児と女主人公第三子・第四子の性の改変について—

小田成江

はじめに

平安時代後期に成立した『夜の寢覺』（以下原作と呼ぶ）には、鎌倉時代後期から室町時代前期に成立したとされる改作本<sup>(1)</sup>があり、通称中村本と呼ばれている改作本が戦後古典文庫に翻刻され、世に広く紹介された。それは、原作の欠巻部の内容を推測するための資料とされたり、原作との比較検討を通して変更された点の指摘とその理由について論じられたりしてきたが、近年では原作から独立させて一個の中世小説としてその性格や主題を論じていこうという動きがある。

しかし、原作があつてこそ改作というものは生まれるのであり、改作本だけを論じてもそこから得られるものは少ないのではなからうか。原作の何を捨て、何を変更し、また新たに何を付け加えたのか、そしてそれらは何のためになされたのか、そ

うた視点を見失うことなく改作本を扱っていかなければならぬと思う。そのように改作本を扱うことを通して、原作の今まで見えていなかった姿を見出す糸口が得られるかもしれない。

さて本稿で取り上げる問題は、昭和三十年代活発な論議のなされた子供達の性別の変更の理由についてである。大君遺児<sup>(2)</sup>は原作では女児だが、改作本では男児になっている。また、女主人公の第三子・第四子<sup>(3)</sup>は、原作では男児・女児だが、改作本では女児・男児となっている。その変更の理由について、大君遺児については物語構想上の観点から論じられたが、第三子・第四子については中世小説の特徴といった観点からの論及しかなかった。しかし、原作と改作本とを比較検討してみるとそれらが、原作改変のためにあらかじめ立てられていた構想のもとになされた変更であり、改作本作者が原作をどのような物語に改変しようとしていたのかが明らかになってくる。以下そ

のことを論じていきたい。なお、原作・改作本どちらも中の君（乙姫君）や中納言の呼称が途中で変化するので、それぞれを「女主人公・男主人公と呼ぶことにする。

#### 大君遺児の性の改変について

大君遺児は、原作では「小姫君」と呼ばれる女児だが、改作本では「形見の若君」と呼ばれる男児に変更され、五十日の祝いの頃女主人公が引き取るが、原作ではそのまま老閨白邸<sup>(4)</sup>で養育され、改作本ではもといた男主人公邸に戻される。この変更について従来次のような見解がある。

(i) 原作の小姫君は男主人公が女主人公に会いに行くための口実として使われているが、中村本では男主人公と女一の宮の結婚はなくなつたので口実としての役割は消えた。原作と趣を変えるため男児にしたのであり、男児だと女児ほど親身な親代わりは必要でないから男主人公のもとに帰した<sup>(5)</sup>。

(ii) 原作巻五後半、男主人公は晴れて女主人公と会えるようになり、女主人公に会いに行くための口実だった小姫君

はその役割を終え不必要な存在となつた。そのためそれ以降描かれなくなつたので、その欠点を訂正するため中村本では男に変えた<sup>(6)</sup>。

(iii) 女主人公と男主人公が大君に対して犯した過失を償うため、大君遺児と女主人公の愛情の強さを強調する必要がある、女児より男児のほうが都合がよかつた<sup>(7)</sup>。

(iv) 女児より男児の方が早く一人立ちさせられるので、中村本は物語結末で大君遺児を成人させ大君関係の事件について締め括りをつけ、主人公達のより完全な幸福を描いた。原作のように口実としての役割はなくなつたので、つまでも女主人公の傍に置いておくとその身辺描写に煩わしいだけの存在なので、男主人公のもとに帰した<sup>(8)</sup>。

これら四説の中では (iv) が、叙述の簡略化と結末の大団円を急ぐための積極的な構想上の理由として考察されており、他の三説より客観性が高いように思う。ただ大君遺児が女主人公の身辺描写に煩わしい存在であるから男主人公のもとに帰したという考えには賛同しかねる。理由は、原作では小姫君の描写は四箇所<sup>(9)</sup>だが、改作本では原作と同年次まで形見の若君の描写は五箇所<sup>(10)</sup>に渡ることから、大君遺児の描写を減少させているとは考えられず、男主人公のもとに帰した理由は他にあると

思われるためである。(理由は後述する。)

さて、この問題を考察するに当たって、原作と改作本の相違点を簡条書きにしてみると次のようになる。

a 男主人公と女一の宮の結婚……〔原作〕成立 〔改作本〕不成立

b 老閨白死後の子供達(女主人公第一子・第二子、大君遺児)の居所……〔原作〕第一子・第二子は男主人公邸、

大君遺児は老閨白邸 〔改作本〕三人とも男主人公邸

c 内侍督参内に付き添った女主人公の退出先……〔原作〕

老閨白邸 〔改作本〕男主人公邸

aは女主人公が男主人公の正妻格となるか否かに関わる点、bは女主人公が面倒を見なければならぬ子供が老閨白邸に残っているか否かに関わる点<sup>(1)</sup>、cはa bの条件によって変わってくる点となっていることに気づく。そして、原作では、女主人公は男主人公の正妻格にはなり得ず(aの点)、老閨白邸には面倒を見なければならぬ小姫君がおり(bの点)、到底男主人公邸に入るような条件は整っていない。しかし、改作本では、女主人公は正妻になり得るし(aの点)、面倒を見る必要のある子供達はすべて男主人公邸にいるわけで(bの点)、男主人公邸に入る条件が整っているのである。つまり改作本は、

男主人公と女一の宮との結婚をなくし、大君遺児を男主人公邸で養育させるといふ筋にすることで、女主人公が宮中退出後、男主人公邸にすんなり入れる条件を整えていたと言えるのではないだろうか。その結果、原作では、男女両主人公が第一子・第二子・大君遺児と共に同居するまで多くの筆を費やしていたが、改作本はそれらを省略して一足飛びに一家の同居へと筋を進めることができたのである。

では何故、大君遺児は男児へと改変されたのか。遺児が男主人公邸で養育されるようになったことと、その性別の変更とは何らかの関わりがあるのだろうか。この点について考察を進めるに当たって、改作本の中で、男女児の養育について登場人物がどのように考えているか、本文を引用しながら見てみたい。(傍線は私に施した)

①とのにたてまつりて待る物は、けふまではかくておはしますめれば、さりともおほしめしすてじと、たのもしく侍り。又おのこごどもは、さりととも君すて給わんや。(中略) よるべなきをんなご、いまひとり侍るが、(中略) のちのよのほだしにおほえ侍り。かならずきさいれさせをはしまして、御ようみ侍べき(巻一 三六〇頁)

源氏太政大臣が出家するに際し、男主人公に子供達のことを

述べている箇所、大君は男主人公と結婚しているので一応安心だが、まだ結婚していない女主人公のことが心配で後事を男主人公に頼んでいる。また息子達については、帝が見捨てることはないだろうからと、心配はしていない。

②すべて、ははなきおんなごは、人のもつまじき物なりけり。

かたのやうにても、ははあらましかば、かか事もあり

なんや(巻一 三七〇頁)

入道(源氏太政大臣)が左衛門督(大君の同母兄)に向かつて、母親が付いていなかったから、女主人公と男主人公との過ちがおこってしまった、形だけでも母親というものが付いていれば姉の夫と妹が通じるというような情けない事態になっただろうか、と嘆く。

③いみじけれど、ははそはぬをんなごは心もとなきを、をの

がかはりに、このちごをかへりみおぼして、とうぐう

にたてまつり給へ(巻三 四五四頁)

男主人公の父関白が娘の中宮に遺言として、石山で生まれた女主人公第一子の後事を頼む箇所である。父関白は、第一子の母親が誰とも知らされていないので、母親が付いていない女子が入内するのは不安だが自分の代わりに後見して東宮に差し上げて欲しいと、中宮に頼んでいる。

④はかばかしからぬ物どものただよひ侍らんを、御らんじす  
てず、をきてさせたまへ。(中略)又をのこごは、をのづ

からおひたち侍らばと、こころやすくおほえ侍れど、い

まだいとけなく侍れば、又なくおもひ侍つる、なごりな

くたちをくれ侍りなん事、まことにみちのさまたげとも

なるべきを、ただいまはあまたも物せさせ給はざるに、

とりわき見きこえ給へ(巻四 四九四頁)

老関白が甥である男主人公に遺言として語る箇所、三人の娘をまだ結婚させていないのでその夫を世話して欲しいと頼み、男子は自然と成長するから安心とはいふものの、まさこ(女主人公第二子)はまだ幼いから面倒を見てやって欲しいと頼む。

⑤ことのおはするよならましかば、わか君をもわたしたて

まつらましやと思ひつづけ給ふに、涙せきあへ給わねば

(巻四 四九八頁)

老関白の死後、まさこ(女主人公第二子)の世話を依頼されていたのを口実に男主人公が自分の邸にその子を迎えとつてしまふことになり、女主人公が手放すのを嘆いている。

⑥ただ姫君の御事、もろともにもよをしおぼさん事ばかりを  
こそ、申す事にて侍れ。めのとなどの、いたりなくうし

ろめたく侍るを、をさなき人、まどのうちなるをりこそ、めはなたずまもられておわせ、やうやうをとなぎおほすれば、うちなどにまいりておわせん程もうしろめたく、みやづかへなどにもいだしつつくも侍らず。それを、おとこをやひとりあつかひ侍らん事の、いと思いたりすくなく侍るを、おなじ御心にもおほしめすまじきにや

(巻四 五〇〇頁)

男主人公が中納言(女主人公の同母兄)に、女主人公が自分との同居を受け入れないことを嘆いて、ただ姫君の世話を一緒にしてもらいたいだけだと訴える。姫君が幼い間は目を放たず守ってやることもできるが、入内させるに当たっては父親一人では困難なのに女主人公は一緒に世話してやろうとは思わないのか、と言っている。

⑦かの姫君のぬすまれ給へるにつけても、ちちをやは、さしもたちそはぬ事なり。はははなれたるをんなごは、みづからの心にも、夢のやうなりしむかしをおもふにも、ひめ君のおとなび給につけても、うしろめたく侍り。なをこのはは君をそへたてまつりては、心やすくおほえ侍るべきを、

姫君のゆくすゑをもおほしいれぬにや(巻四 五〇六頁)

老閨白の次女が宮の宰相中将に盗み出された事を受けて、男

主人公は、女子の傍に父親は付いておれないのだから、母親が傍に付いていない姫君にそのような事が起こりはしないかと心配している。

これらの用例から、女児の養育には母親の手が欠かせないと考えられていたこと、男児は親の手をあまり煩わさず成長すると考えられていたが、幼い間は父親が傍にいたほうが良いと考えられていたことなどが見て取れる。特に②③⑦の傍線部のような表現に、母親が傍に付いていない女児は特別な状況に置かれていてという意識が働いているように思われ、親権者の男性が不安がつている様が描かれている。その理由としては、垣間見によって思わぬ男が接近したり、或いは拉致されたりということもあるからで、また、入内ということになれば母親が付き添うのが慣例となっていたからであろう。とにかく女児については成人させ結婚させるまで母親の存在が不可欠と言ってもいいくらいである。また、男児については父親の官位に應じて朝廷から官位が付与され、結婚についても相手の女性の実家の世話を受けるわけで、男児の親はその養育に女児の場合ほど気を使わなくてよかったと考えられる。<sup>(12)</sup>しかし、④や⑤に見られるように、男児も幼い間は父親が傍にいたほうが良いと考えられていたらしく、それは笛や学問の手ほどき、将来男性貴族と

して世に立つていくための儀礼や作法についての素養は母親からでは教授しにくかったからであろう。<sup>(13)</sup>

このような男女児の養育についての考え方は、改作本独自のものではなく原作の当該箇所にも見られることから、恐らく原作成立当時から貴族社会の通念として定着していたものと思われる。そこで、本論に戻るが、もし改作本でも大君遺児が女兒のままであつたら、女主人公が手許に引き取つてずっと養育し続けることになつたのではないだろうか。男主人公の母親が育てるとすることも考えられなくもないが、大君の遺言もあつたことから、女主人公が母親代わりになつて養育するという筋になつていた可能性が高い。そうなると、老閨白邸には世話をせねばならない大君遺児がいるので、女主人公は宮中退出後男主人公邸にすんなり入るといふ筋にはなりにくかつたらう。男主人公邸に入るまでにさらに紆余曲折を経ることになつたのではないだろうか。

ところが、大君遺児を男児にしたことで、女主人公が養育する必要性はなくなつたと言える。男児の養育は母親よりも父親の影響が大きいことから、女主人公に渡してしまつてしまひ、大君遺児は実父がいるにもかかわらず、実父の叔父が養育すると

いうことになる。さらにこの場合、大君遺児は男主人公の正妻が生んだ嫡男であり、実父が死亡したり出家したりしていない限り社会通念上からも嫡男は実父が手許で養育するのではなからうか。少なくとも女主人公が引き取るよりは、男主人公が手許で養育する方が当時の社会通念に沿つたあり方だつたと思われる。

ここに改作本が大君遺児を男児に変えた理由があつたと思われる。つまり、女主人公が宮中退出後すぐに男主人公邸に入り、そこに居る三人の子供達とも同居できるようになつたという筋にするために、大君遺児は男児に変えられずと男主人公邸で養育されることにしたのである。なぜそのような筋に改変したのかと言えば、原作にあつた次のような内容を省略し、物語の短縮を図つたためであると言えるのではないだろうか。

「原作中、女主人公が宮中退出後から男主人公と同居するまでの間にあつた主な出来事」

男主人公が老閨白邸に連れて来た石山姫と対面。

病に悩む女一の宮に女主人公を名のる生霊が現れたという噂に悩む。

広沢の父入道の許に移る。

男主人公との間に悩み病がちでもあり出家を計画する。

出家の計画を知った男主人公が驚いて石山姫とまさこを伴  
ない広沢に行く。

男主人公は入道に真相を打ち明け二人の仲を認めてもらう。

女主人公の病は懐妊のためであることが判明。

男主人公との同居を受け入れて子供達と一緒に男主人公邸

へ入る。

このように大君遺児の性の変更は、男主人公と女一の宮の結  
婚をなくしたとと連動して、男女両主人公一家の同居を早め  
るために原作を短縮化するという構想のもとになされた改変で  
あったと結論づけることができる。

#### 女主人公の第三子・第四子の性の改変について

原作では女主人公の第三子誕生は物語第十六年二月で、男児  
であった。その後、朱雀院崩御（原作巻五の脱文中にあり）、  
同年七月内侍督の皇子誕生という記事で終わるが、末尾欠巻部  
には諸資料<sup>(14)</sup>により、次のような記事があったことが知られて  
いる。第一子（石山姫）の裳着、第二子（石山姫）の東宮への  
入内、帝の退位、東宮の即位、第一子（石山姫）の立后、内侍

督の皇子の立坊、入道太政大臣（女主人公の父）の七十の賀、  
女主人公の偽死事件、女主人公の第四子（女児）誕生、第二子  
（まさこ）と女三の宮の恋愛、第二子（まさこ）の冷泉院勘当  
事件など。

一方、改作本では、第三子誕生は物語第十五十二月で、女児  
であった。その後、第十六年四月内侍督の皇子誕生、同年八月  
第一子の裳着、女主人公第四子を懐妊、十月石山詣で、第十七年  
二月第四子（男児）誕生、四月第一子の東宮への入内、この後  
の年立ては不確定で、第二十年頃<sup>(15)</sup>朱雀院崩御、帝の退位、東宮  
の即位、内侍督の皇子の立坊、第一子の立后の場面で終わる。

第三子・第四子の性別の他に大きく改変された点は、第四子  
の誕生の時期が原作より早められていることと、朱雀院崩御の  
時期が原作より数年遅く設定されていること、第二子立后の記  
事以下にあった原作の多くの内容が削除されていることであ  
る。（その他原作に存在したかどうか不確定の記事については  
ここでは触れない。）特に、第四子は原作ではかなり後に誕生  
したと思われるが、改作本では第二子立后の場面で物語が終わ  
る時すでに三、四歳になっている。このことと性別変更とはな  
んらかの関連がありそうに思える。

ところで、この女主人公の二子の性別変更の理由については、

従来どのように言われてきたのであろうか。例えば、原作と趣を変えらるためである（注（5）の長谷川説）とか、女主人公の四人の子供達の性別を男女交互にして通俗読者層の好みに合わせ<sup>16</sup>たとか、女主人公の四人の子供達の性別を男女交互にしてわかりやすい図式的効果をねらった（注（7）の永井説）などの説があるが、物語構想上からの考察は特になかった。

しかし、この第三子・第四子の性別変更も、第四子の誕生を早めたことと共に、物語構想上の必要性からなされたことであつたと考えられる。そのことを端的に物語っているのは、改作本最後の立後の場面であるので次に引用してみる。（傍線は私に施した）

①その頃、すざくみんいたうなやみ給ふ事もなくて、かくれ給ふ。（中略）とうぐうくらるにつき給へば、との姫君きさきにたち給。ないしのかみのわかみや、とうぐうにたち給ふ。この時の御ありさまども、いとめでたし。きさきのみやは、いとちいさき御程に、たてまつれる御ぞのかさなりなど、かぎりあるわざなりければ、くれなゐのむつばかりにこうばいの五冬のおり物、さくらのこうちきき給へる、いとたをやかに、はじめて見たてまつり給ふ人々をつつましげに、御あふぎさしかくしてゐさせ

給へるさま、たとへていはんかたなし。さばかりのとの、うへの御中よりいでおはしたる、おろかならんや。うへはおとなしく、やなぎのかたもんの御ぞやつばかり、さくらのこうちき、もへぎのうちものからきぬ、あふぎなどもいたくさしかくさず、やはらかにもてなして、いざりいでたてまつるさま、いま見つけたらんやうにめぐらかに見ゆ。こ姫君は、こうばいのこくうすきおりもの御ぞ、もえぎのおり物のうちき、かしこまりのために御もひきかけてゐ給へる、うつくしといはんかたなし。わか君、ふりわけがみにて、侍従の君うちつれてまいり給へる、いづれもらうたくみゆ。とのも、もやのみすのもとにおはしまして、「みすのうちゆりぬ、ほゐなく」ときこえ給ふ御さま、ふりずいみじく見えさせ給ふ（巻五五五六頁）

この場面には、きさきのみや（第一子）、うへ（女主人公）、こ姫君（第三子）、わか君（第四子）、侍従の君（大君遺児）、との（男主人公）、といった主人公達一家が登場しているのだが、第二子が描かれていない。

この点について、小松登美氏は原作にも同様の場面があり、こ姫君（大君遺児）、わか君（第三子）、侍従の君の代わりに



「まさこ」がいたと推測される。さらに女主人公には全部で五人の子供が生まれていたとされ、この場面には第四子（女児）もいたろうが、中村本ではそれを削ったとされる。中村本は大君遺児を男児に、第三子を女児、第四子を男児にしていたので、それらを原作の子供達に対応させている時混乱が生じて第二子が消えてしまったという考えである<sup>(17)</sup>。

しかし、原作でも女主人公の生んだ子供の数は四人とされており、第一子立后までには第三子までしか誕生していない<sup>(18)</sup>。そしてこの立後の場面は原作にも改作本と同じようであったろうことが『無名草子』の記事から推測されている。とすれば、ここの「こ姫君」は原作の大君遺児の呼称であったから、改作本がそれを第三子に該当させ、「わか君」は原作の第三子とすれば改作本がそれを第四子に該当させたということは十分考えられることである。原作では五、六歳で、振り分け髪（おんげ）の男児であったのかもしれない。そしてその弟と連れ立ってやって来たのが「まさこ」であり、改作本ではそれを大君遺児に該当させたと考えられないだろうか。改作本では第二子より大君遺児に叙述の重心が傾いていたので、第二子より大君遺児の方をまず取り上げたものと思われ、その結果第二子がこの場面から抜け落ちてしまったのであろう。

言い換えると、改作本作者は、原作にもあったと思われる石山姫立後の場面をそのまま使って物語を終えようと考え、そこに登場する四人の子供達に該当させる子供を創り出す必要に迫られた。さらに、原作では女主人公は四人子供を産んでいるのでその数を同数しておく必要もあった。そこで考えついたのが、第四子誕生を早めて立后以前にし、第三子を女児に、第四子を男児にすることであった。そうすれば、「まさこのみや」を第一子、「こ姫君」を第三子、「ふりわけがみのわか君」を第四子、それと連れ立ってやって来る若者を大君遺児に該当させることができ、うまくこの場面を使って物語を終えることができる。

そして、このアイデアはこの場面以前でも原作の「小姫君（大君遺児）」「若君（第三子）」が登場する場面で活用でき、原作の場面を利用しながら物語を短縮化していくことができるのである。その活用例を次に挙げてみよう。

②かくてとのうへ、又ただならぬ御けしきになやみ給ふを、あはれにうれしくおぼしながら、いみじかりし事にこりて、かねてより御ころをつくし、御いのりなどはじめ給ふ。おもふさまにたいらかにもし給はば、やがて姫君の御まいりをおぼしめすに、御いのりのために、い

し山にぐしたてまつりて、こもり給べきよしおほす。十月なかの十日のほどに、かんだちめ、てん上人などあまた御ともまいり給ふ。めづらかにありがたき見ものにてぞありける。三位の中将どの、かぎりなくかしづきたてられて、ひかりさしそふこちしけり。こわか君は、

との御車にたてまつらせ給へり。(巻五 五五三頁)

物語第十六年、女主人公第四子懐妊、そして十月、一家で石山詣でに出発する場面。傍線部「三位の中将どの」は第二子、しかし「こわか君」に該当する子供がいない。大君遺児だと、

「かたみのわか君」となるはず。そこで第三子に該当すべき子供を改作本作者が誤った叙述にしてしまったのかと、「わか」の横に「ひめカ」という書き入れが中村本にはあるが、小松登美氏の指摘<sup>(19)</sup>のように原作にあった叙述をそのまま残したものではないだろうか。原作では、男主人公が第三子を片時も傍から離せないほど大切に扱っている様が描かれ(巻五)、ここでもわざわざ牛車に同車させるといふ叙述があったものと考えられる。つまり、原作にも石山詣での記事があり、改作本作者はその出発場面を利用したのだが、「まさこ」については呼称を変えたものの、「こわか君」(まさこは「若君」と叙述され、第三子はそれと区別するために「小若君」と叙述されていたので

はないか)については、すでに第三子(女児)第四子(男児)を原作の「小姫君(大君遺児)」「若君(第三子)」に該当させるアイデアをもっていたため、まだ第四子が生まれる前の記事であるにもかかわらず、つい原作のままの呼称を使ってしまったと考えられないだろうか。

③かくて、うへのまかで給はん事を、ねうごいいたうおほしなげきたれば、いますこしもとて、こひめ君、わか君なども忍やかにまいらせて、みたてまつり給ふ。(巻五 五五五頁)

物語第十七年四月、第一子東宮女御として入内、その時付き添った女主人公が女御の要請で退出予定を延ばすことにしたので、「こひめ君」「わか君」を呼び寄せて宮中で世話をすることになったという場面。改作本では、第三子「こひめ君」は三歳、第四子「わか君」は二ヶ月前に誕生したばかりである。すると女主人公は、産後の肥立ちも十分でない頃に女御の世話のために宮中に行き、おまけに「こひめ君」や乳児「わか君」の世話までしていることになる。「わか君」の五十日や百日の祝いのことにも触れていず、原作の作者では到底考えられないような内容である。

しかし、このような場面が原作にもあったと考えると、そこ

での「こひめ君」は大君遺児、「わか君」は第三子で二、三歳だろうから、右のような日程上の問題は生じない。つまり、原作にもこのような場面があったと仮定すると、改作本作者はそこに叙述されていた小姫君・若君をそのまま利用して改作していったため、日程上の問題が生じたと考えられるのである。

①で述べたように、改作本作者は第四子の誕生を原作より早めることにしたのだが、いつ誕生させるかとなった時、原作にもあったと推測されるこの③の場面を利用しようとしてこれ以前に誕生させておくことにしたと思われる。第三子の誕生を原作より早めたのも、このことと関連するかもしれない。<sup>(20)</sup>

以上①②③は、改作本の叙述のままであれば何らかの問題点が生じる場面であったが、次の④は改作本の叙述のままで問題とは生じないのだが、第三子の性を変え原作の大君遺児に該当させるというアイデアを活用した場面とみなすことができるのではなからうか。

④又の日、こひめぎみをみたてまつらせ給ふに、あね君にをとり給べくも見えず、ありがたくおぼえ給ふ。(巻五 五

五一頁)

物語第十六年八月、第一子裳着に際し中宮がその腰結役として男主人公邸に来た時、第三子「こひめぎみ」に対面した場面

である。原作でも中宮が腰結役であったことは『拾遺百番歌合』の詞書から知れるが、大君遺児(小姫君)との対面はあつたのではないだろうか。<sup>(21)</sup> 改作本作者はその場面を利用して「小姫君」をそのまま自作中の第三子に該当させ、石山姫のことを原作では「姫君」と表現していたのではないかと思うが、それを「あね君」という表現に変えたと考えられないだろうか。

このように、改作本作者のアイデアが、原作の場面をうまく活用していると思われる例を見てきたが、第三子の呼称について調べてみると次のようなことが分かる。

改作本作者が、第三子を男児から女兒に変更したために独自にその呼称を創り出した箇所と、原作の「小姫君」という呼称をそのまま使ったと思われる箇所とがみごとに区分されている。これはどういふことかと言えば、誕生した時「ひめ君の御もり、めのとなど、なべてならぬをとえらび給ふ。」(巻五 四二頁)、祖父入道が対面した時「このたびの姫君見たてまつり給ふにも、あね君の御事、まづおほしいづ。」(五四六頁)、男主人公が可愛がる場面「とのほ、此たびの姫君、御ふところをはなち給はず、いとかなしくし給ふ。」(同)、五十日の祝いの頃「いまひめ君の御いかのほどよりぞ、うへの御心地さはやかになり給。」(五四七頁)となっており、これらの箇所には原作

での小姫君（大君遺児）を該当させてみることはできない。しかし、これ以降第三子が登場する場面（年次順で前述の④③①）ではその呼称が「こひめ君」となっており、原作での小姫君を該当させてみるのできる場面である。第三子が乳児でなくなつたから呼称が変わつたと考えられるかもしれないが、大君遺児は五十日の頃から元服するまでずっと「かたみのわか君」と呼称されているから、乳児と幼児で呼称を変化させるといふ方針でもなさそうだ。つまり④③①では原作にあつた「小姫君」をそのまま第三子に転用したとみてよいのではないだろうか。そしてこの第三子の呼称の変化という現象からも、改作本作者は原作の「小姫君」「若君」を自作中の第三子・第四子に転用することを思いついたと言えるのではないだろうか。

以上の考察から、改作本は第一子立後の場面で物語を終えるという構想のもとに、第四子の誕生を早め、原作の大君遺児・第三子が登場する場面では彼らを、原作と性別を変えた改作本の第三子・第四子に転用することで、その場면을自作中にそのまま利用し、結末へとつなげていったと言えるのではないだろうか。つまり、第三子・第四子の性別の変更は、第一子立後の場面で男女両主人公の子供が原作と同数になり、一家総出（22）のまことにめでたい結末を迎えたという話にするための改変で

あつたと言えよう。このような観点から、女主人公の第三子・第四子の性の変更も、物語構想上の必要性からなされたことであつたと結論づけることができるのである。

おわりに

これまでの考察をまとめてみると、大君遺児の性の変更は、原作の内容を大幅に省略して男女両主人公一家の同居を早めるという構想のもとになされた改変であり、第三子・第四子の性の変更は、第一子立後の場면을一家総出のめでたい場面にして物語を終えるという構想のもとになされた改変であつたということである。

このように主人公達の子供の数を変えることはせず性別を変更することで、原作にある場面を生かしながら原作を短縮化し、結末に一家が出揃うめでたい場面を迎えるという物語に改変したのが、改作本『夜寝覚物語』であつたと言えるであろう。

注

〔1〕成立時期については、永井和子『寝覚物語の研究』（笠間

書院 昭和四十三年七月) 第三章第一節、「夜寢覚物語」  
上下(古典文庫 昭和二十九年・三十年)の解説(金子  
武雄)など参照。

(2) 原作巻一で大君と中納言の結婚が成立しているが、中間欠  
巻部で大君は女兒を生んだ後亡くなり、五十日の頃の君  
が引き取って育てる。改作本では男児にし、五十日の頃乙  
姫君(中の君)が一旦引き取るものの再び中納言のもとに  
帰している。

(3) 原作巻一で中の君は中納言との間に第一子石山姫を生んで  
いるが、中間欠巻部で第二子まさこを生む。巻五で第三子  
(男児)を生むが、第四子の出産は末尾欠巻部にあたり、  
『寢覚物語絵巻』詞書から、女兒であったことがわかって  
いる。改作本では、第四子まで生まれている。

(4) 改作本で女主人公と結婚した左大将は後に閑白になるが、  
男主人公も後に閑白になるので区別するため、女主人公と  
結婚した左大将を老閑白と呼ぶことにする。

(5) 長谷川和子「寢覚『小姫君』考」(学習院大学国語国文学  
会誌)第一号 昭和三十一年一月)

(6) 北川大成「『夜半の寢覚』系図論—小姫君考—」(平安文  
学研究)十八 昭和三十一年五月)

(7) 注(1)の永井著書の第二章第二節「登場人物の改変」参照。

(8) 種本節子「中村本『夜寢覚物語』の改作態度—人物の改変  
についての一考察—」(語文)二十一 昭和三十三年十二月)

(9) 原作については、新編日本古典文学全集 『夜の寢覚』  
(小学館 平成十五年七月)をテキストとする。その巻四  
の三四〇頁・三七八頁・四一一頁、巻五の四八三頁に小姫  
君の描写が見られる。

(10) 改作本については、『鎌倉時代物語集成』第六巻所収『夜  
寢覚物語』(笠間書院 平成五年五月)をテキストとする。  
以下の本文引用もここからとする。形見の若君の描写は、  
巻五の五三三頁・五三六頁・五三九頁・五四六頁・五四八  
頁に見られる。

(11) 改作本で、老閑白の次女・三女はすでに夫のある身となっ  
ており、ひとまず女主人公の手を離れたとみてよいだろう。  
原作でも改作本とほぼ同様の状況である。

(12) 服藤早苗『平安朝の母と子』(中公新書 平成三年一月)、  
服藤早苗「通過儀礼から見た子ども帰属—平安中期を中  
心にして—」(縁組と女性—家と家のはざま—(新装版))  
早稲田大学出版部 平成十五年九月) 参照。

(13) 原作では、男主人公がまさくに、笛・学問の手ほどきを自

分がしてやれなかったことで、繰り返し女主人公に愚痴をこぼしている。

(14) 『無名草子』『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』『寢覚物語絵巻』詞書などを言う。

(15) 永井和子は第十九年(注①)の永井著書の第二章第二節。宮田光は十九年か二十年(中村本『夜寝覚物語』年記考)『松村博司教授停年退官記念 国語国文学論集』名古屋大学国語国文学会編 昭和四十八年四月)。小松登美は原作の二十一年か二十二年(『寢覚物語全釈』「中間ならびに末尾欠巻について」学燈社 昭和三十五年九月)。阪倉篤義は原作の第十八年(日本古典文学大系 『夜の寢覚』岩波書店 昭和四十九年二月)。等の説があるので二十年頃としておく。

(16) 大概節子「中村本『夜寝覚物語』の改作態度―人物の性別の変更及び女主人公第四子の想定について―」(『平安文学研究』二十三 昭和三十四年七月)

(17) 注⑮の小松著書で。さらに小松氏は、この場面で「こ姫君」が裳着の年齢に達していないにもかかわらず、裳をつけていることを問題とされているが、これは『うつほ物語』(楼の上・下)で六歳の「いぬ宮」が裳をつけている姿が

描かれているように、裳着の年齢に達していなくとも、晴れの場では姫君が裳をつけることもあったようだ。(石埜敬子・加藤静子・中嶋朋恵『平安時代の信仰と生活』IV「平安時代の容儀・服飾」至文堂 平成六年) 参照。

(18) 『寢覚物語絵巻』詞書に女主人公が女兒を生んだという記事が見える。原作末尾欠巻部でその他に子供を出産していたかどうかはわからないが、白河院幽閉や偽死事件、世間から隠れ住んでいたことを考えるとそれ以外の子供の出産はなさそうである。さらに、改作本は主要人物については原作より増員したり、系図上の配置を変更したりすることはまずなさそうである(永井氏が注①の著書で指摘)から、男女両主人公の間の子供の数は原作を踏襲していると思われる。

(19) 注⑮の小松説を紹介した章に同じ。

(20) 第三子誕生、内侍督皇子出産とその後の様子、第一子の裳着に伴なう様々な儀式、石山詣で等の記事の間を縫って第四子の懐妊と出産の記事を入れるには、現行の改作本のようにせざるを得ないのではないだろうか。

(21) 小松氏もそのように推測している。(注⑱に同じ)

(22) この場面に第二子が見られないことについては本文中にも

述べたが、原作に登場していた子供達をそのまま転用したため一人分不足することになり、その際作者には大君遺児の性の変更が頭に強くあったのと、この少し前に大君遺児の元服のことを叙述したとで、第二子よりも叙述の比重が高く、大君遺児を登場させる方に注意が払われていたためと考えられる。

(おだ まさえ／本学大学院生)